「仮説」を立てる授業実践
―新科目『日本史探究』を想定して―

中　野　光　浩（神奈川県立荏田高等学校 教諭）
松　本　浩　之（文教大学情報学部）

Classroom Practices for Proposing ‘Hypotheses’:
With the New Subject ‘Advanced Japanese History’ in Mind

NAKANO MITSUHIRO, MATSUMOTO HIROYUKI
(Teacher of Kanagawa Prefectural Eda High School)
(Faculty of Information and Communication, Bunkyo University)

１．はじめに

2018年に公示された学習指導要領の『日本史探究』では、中項目（１）で生徒が「時代を通観する問い」をたて、（２）で生徒が「仮説」をたてるとしている。大項目「C　近世の日本と世界」を例にとれば、「中世から近世への時代の転換を理解する」ための授業を行い、それを踏まえて「近世の特色について多面的・多角的に考察し、時代を通観する問いを表現する」授業をおこなう。時代の特色を示す資料を活用し生徒が立てた「時代を通観する問い」を深め、生徒が探究的な学びに向かうための「仮説」を表現するための学習をおこなう。学習指導要領の解説には「教師が、例えば、資料と時代の特色の関係を結びつけるような様々な問いかけを行うなどして、生徒が、資料から時代の特色を見いだすための視点を形成するように指導を工夫すること[1)]」という留意点が示されている。「時代を通観する問い」を立て、それについて考察し「仮説」を立てるという学習は、私たちにとって経験がほとんどないものである。本稿は、神奈川県立荏田高等学校において学校設定科目『近世日本の探訪』選択２クラスにおいて、2022年度・23年度に行なった生徒が「仮説」をたてる授業の実践報告である。

２．授業実践

（１）「将軍」「守護大名」「民衆」の３つを基軸にして「仮説」を立てる

表１

単元の目　標	室町時代後半の特徴をとらえよう
授業数	内容
1	室町時代後半の仮説を立てる
2	惣村と土一揆
3	応仁の乱と国一揆
4	農業・商業の発達
5	室町時代の文化
6	戦国時代
まとめの記述【課題】	

６月に行なわれた室町時代後半の単元（表１参照）では、単元の目標を「室町時代後半の特徴をとらえよう」とし、１時間目に①将軍の権力②守護大名の権力③民衆の力という３点を基軸として室町時代後半の特徴を、簡単な根拠を示しながら生徒に仮説を立てさせることにした。

仮説を立てるにあたって、これまでの学習の流れを復習した後で、「応仁の乱」「惣掟」の資料をグループで学習させた。「応仁の乱」については中学の既習学習の内容を復習し、

教科書所収の『真如堂縁起』（足軽が真如堂で掠奪をしている図）を読み取らせた。「惣掟」は教科書所収の今堀日枝神社文書を読み、村の運営のために寄合で自治的に定めた村の掟であること、このような掟が定められた自治的な村が、災害の際の年貢の減免、都市民や困窮した武士とともに徳政を求めて立ち上がる基盤になっていたことを確認した。土一揆（徳政一揆）は中学の既習内容でもある。①将軍の権力②守護大名の権力③民衆の力という３点を基軸として室町時代後半の特徴を、簡単な根拠を示しながら仮説を１枚ポートフォリオに記入させた。（図１参照）１枚ポートフォリオ（OPPA）とは、One Page Portfolio Assessmentの略で１枚ポートフォリオ評価のことである。A3 １枚の用紙に①学習前の「問い」への生徒の答え②単元学習中に生徒が考えた授業の大切なこと・振り返り③学習後の「問い」への生徒の答え④学習後の自己評価が集約されているものである。１枚に学習課程が「見える化」されているため、生徒は自己の変容や学習の成果を認知しやすくなり、教師も授業評価と改善を行なうことができるものである[2)]。

生徒が立てた仮説の主なものは、表２の通りである。これまで学習した室町時代前半の知識を活用して、仮説を立てているケースが①⑥⑩である。受験生で予習をしている生徒だろうか、まだ学習をしていない室町時代後半の知識を活用して仮説を立てているケースが⑤⑬⑭である。その他についても、中学までの歴史学習の知識や「応仁の乱」「惣掟」などの史資料を参考にして、簡略で不十分なものもあるが、根拠を示して仮説を立てることが出来ている。仮説を立てた段階でポートフォリオを回収し、評価をして返却している。

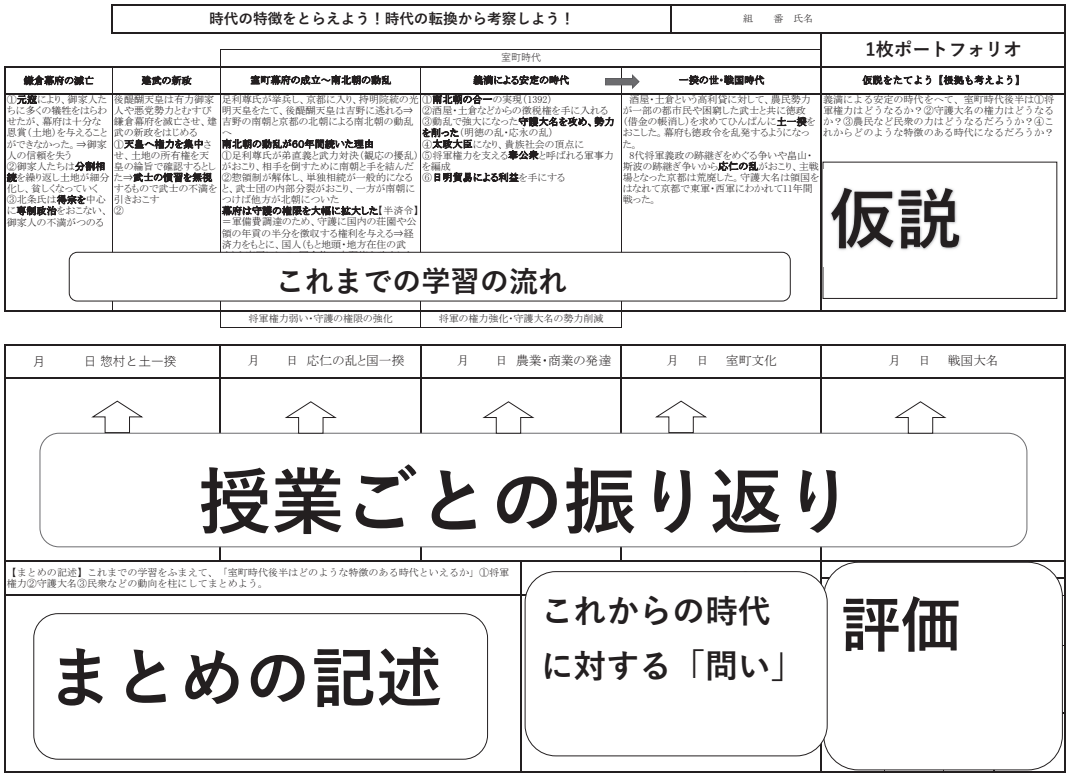
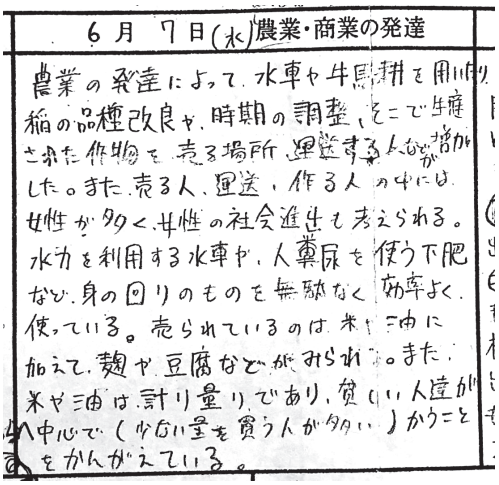


図１

表２　室町時代後半に関する仮説

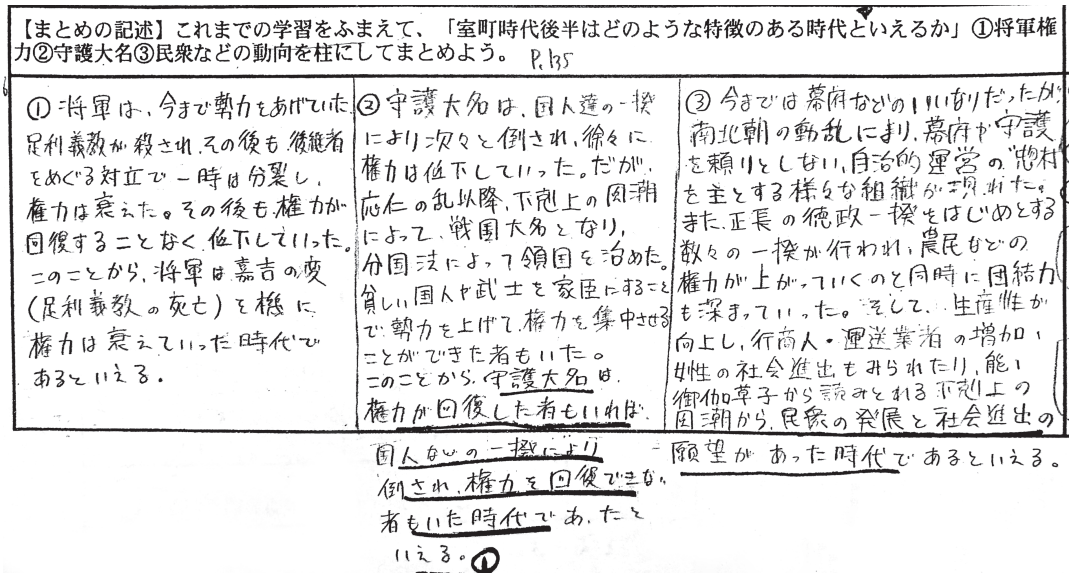
仮説		根拠
将軍権力	弱体化	①足利義満は、将軍と太政大臣を兼ねており、五山・十刹の制をつくり臨済宗を支配するなど、武家・貴族・宗教など全てを支配していたが、他の将軍はそんな力はないと思うから。 ②応仁の乱で長期間争っているため、国の統治はおろそかになり将軍権力は弱まるから。 ③将軍権力をめぐる争いが長期化すると、将軍家が分裂し将軍権力が弱まるから。11 年間に及ぶ戦闘で京都が焼け野原になったということから、京都に政権がある将軍の権力も衰えるのではないか。 ④土一揆を頻繁におこしている民衆は幕府に不満を持っているだろうし、徳政令を乱発する幕府に高利貸などからも不満がでると考えられる。徳政令を出せば、幕府は高利貸から徴税することが難しくなるため、将軍権力は弱まったと思う。 ⑤嘉吉の変で、将軍足利義教が赤松氏に殺害され、将軍の権力が揺らいでしまうため。
	強化	⑥室町時代前半で将軍を支える軍事力として奉公衆が編成されて将軍権力が強化されているので、後半も戦乱の中でも将軍権力は強化されると思う。
守護大名	強大化	⑦将軍権力が弱くなり、まとめ役がいなくなって、そのすきをついて守護大名は権力を強化していくのではないかと思う。 ⑧幕府の力が弱まったから、相対的に守護大名の力が強くなる。 ⑨幕府に守護大名を統率する力がなくなってくると、守護大名はそれぞれに力を持って独立していくので権力を持つようになる。 ⑩室町時代前半で、幕府が守護に徴税権など経済力を与えたため、室町時代後半も権力を失わないのではないか。
	弱体化	⑪応仁の乱や地域的な争乱に疲れて、守護大名の権力は弱体化する。 ⑫11 年も領国を離れており、国内の政治を怠っているので、その間に民衆が好き勝手するのではないか。 ⑬応仁の乱で守護大名が京都で 11 年間戦っている中、大名の地元では守護代や有力な国人が力を伸ばしているため。 ⑭政治的な要求をする土一揆もあるので、そういった民衆の力を抑えられないため。
民衆	強くなる	⑮室町時代の村は、掟の制定や土一揆をおこすなど団結力が強まっているから。 ⑯幕府が相次ぐ戦争で弱体化していたから、民衆は立ち上がり土一揆をおこしている。幕府が徳政令を出さざるを得ないほど、民衆が幕府を追い込んでいるから。 ⑰不満に思っていることを一揆をおこして訴えるようになったため、民衆の力は強くなっていると考える。
	弱く	⑱時代が安定していないと、農民にかかる負担が大きくなり生活しにくくなると思うから。

仮説を立てた後、①惣村と土一揆②応仁の乱と国一揆③農業商業の発達④室町文化⑤戦国大名について授業を行なった。（表１参照）生徒は毎時間後に１枚ポートフォリオに「授業で大切に思ったことや、仮説に関連する内容のまとめ」を振り返りとして記入した。農業・商業の発達の授業では、ある生徒は女性の社会進出に注目していた。（図２を参照）授業では『七十一番職人歌合』という職人の絵画資料を使っていたが、私はこのポートフォリオのおかげで、生徒がこの絵画資料をどう受け止めたのか新たな気づきを得ることが出来た。


6月7日(水)農業・商業の発達

農業の発達によって、水車や牛馬耕を用いり稲の品種改良や、時期の調整、そこで生産された作物を売る場所、運搬する人などが増加した。また、売る人、運送、作る人の中には女性が多く、女性の社会進出も考えられる。水力を利用する水車や、人糞尿を使う下肥など、身の回りのものを無駄なく効率よく使っている。売られているのは米や油に加えて、麹や豆腐などがみられる。また、米や油は計り量りであり、貧しい人達が中心で（少ない量を買う人が多い）ということをかんがえている。

図２



【まとめの記述】これまでの学習をふまえて、「室町時代後半はどのような特徴のある時代といえるか」①将軍権力②守護大名③民衆などの動向を柱にしてまとめよう。 P.135

①	②	③
①将軍は、今まで勢力をあげていた足利義教が殺され、その後も後継者をめぐる対立で一時は分裂し、権力は衰えた。その後も権力が回復することなく低下していった。このことから、将軍は嘉吉の変(足利義教の死亡)を機に権力は衰えていった時代であるといえる。	②守護大名は、国人達の一揆により次々と倒され、徐々に権力は低下していった。だが、応仁の乱以降、下剋上の風潮によって、戦国大名となり、分国法によって領国を治めた。貧しい国人や武士を家臣にすることで勢力を上げて、権力を集中させることができた者もいた。このことから、守護大名は、権力が回復した者もいれば、国人などの一揆により倒され、権力を回復できない者もいた時代であったといえる。①	③今までは幕府などの言いなりだったが、南北朝の動乱により、幕府や守護を頼りとしない、自治的運営の惣村を主とする様々な組織が現れた。また、正長の徳政一揆をはじめとする数々の一揆が行われ、農民などの権力が上がっていくのと同時に団結力も深まっていった。そして、生産性が向上し、行商人・運送業者の増加、女性の社会進出もみられたり、能、御伽草子から読みとれる下剋上の風潮から、民衆の発展と社会進出の願望があった時代であるといえる。

図３

ポートフォリオの最後に、単元の「まとめの記述」として、これまでの学習をふまえて、室町時代後半はどのような特徴のある時代と言えるのか、将軍権力・守護大名・民衆の動向を柱にまとめさせた。（図３参照）守護大名については、仮説を考える段階では生徒は強大化と弱体化の２つに大きくわかれていたが、授業後は以下の記述のように、国人層を家臣団に取り込み戦国大名へスライドしたものと、国人一揆に倒されていくものの２つのコースにわけて記述できている生徒が多くなった。また、民衆の動向については、惣村と土一揆、農業・商業の発達、室町時代の文化の３つの授業内容をまとめた記述となっている。

（２）自由記述で「仮説」を立てる

出版された『日本史探究』の教科書の近世の部分を一覧すると、「歴史資料と近世の展望」と題して、仮説を立てるための歴史資料を用意している。資料内容は政治・外交が中心で[3)]、内容も生徒にとってやや難しいように思われる。そこで、10月に行なわれた江戸時代中期の単元の目標を、生徒が比較的取り組みやすい「問い」である「戦乱がなくなったことで人々の生活はどのように変わったのだろうか？」に設定した。生徒の思考を誘発する史資料を用意し、（図４　授業プリント参照）１時間目に仮説をたてさせ、以後の学習に対して見通しを持たせることにした。（表３参照）

表３

単元の目　標	戦乱がなくなったことで人々の生活はどのように変わったか
授業数	内容
1	「戦乱がなくなったことで人々の生活がどのように変わっただろうか」仮説を立てる
2	農業生産の進展
3	諸産業の発達
4	交通の発達と整備
5	江戸時代の物流と貨幣・金融
6	元禄文化
まとめの記述【課題】	

図４　授業プリント　資料を活用し、時代の特色について仮説を立ててみよう

戦乱がなくなったことで人々の生活はどのように変わったのだろうか？

Ａ　外国人から見た近世の日本

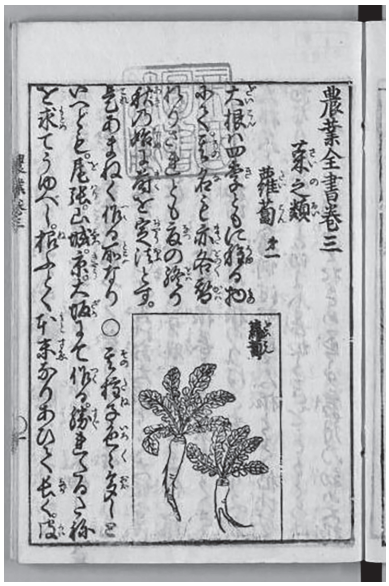
シーボルトは、オランダ商館の医者で、1826（文政９）年にオランダ商館長に従って江戸へ向かいました。その記録によれば、「おそらくアジアのどの国においても、旅行というものが日本におけるほどこんなにも一般化している国はない。自国の領地から江戸へ行き来する大名たちの絶えまない行列・活発な国内商業・その貨物の集散地大坂には、あらゆる地方から売り手や買い手が殺到するし、また巡礼旅行も非常に盛んである。」（『江戸参府紀行』）

問１　「鎖国」の中で、オランダ人は出島の外に出る機会は、オランダ商館長の江戸参府に限られていた。彼が驚いたことは何か。箇条書きにしてみよう。

Ｂ　耕地面積の増加

	全国の耕地面積
1340年室町初期	95万町歩
1600年江戸直前	164万町歩
1720年江戸中期	297万町歩
1872年明治初期	359万町歩

江戸時代の前半に耕地面積が飛躍的に増加していることがわかる。**戦国時代以来発達していた築城の土木技術**が、河川の洪水を防ぎ、湖や沼を干拓して耕地面積を拡大することに活用されたためである。



Ｃ　農業全書から見た近世日本

『農業全書』は、宮崎安貞（元禄 10 年（1697 年）によって刊行された農書（農業技術書）である。出版されたものとしては日本最古。植物の絵入りで、五穀・野菜・果樹など当時栽培されていた植物がほぼすべて網羅されている。最も体系的な農書で、明治に至るまで何度も刊行された。右の図は（　　）の作り方が絵入りで書かれている。**みかんやぶどう、お茶などお金になる作物である商品作物の作り方**も丁寧に書かれている。

問２　耕地面積が増え、このような農書が普及すると、農民の暮らしはどうなるだろうか？

問３　農書が広く読まれるようになった背景には、どんな事が考えられるか？

三都の町方人口の推移

江戸	1634年	14万8719
	1721年	50万1394
	1873年	59万5908
大坂	1625年	27万9610
	1721年	38万2471
	1873年	27万1992
京都	1634年	41万98
	1719年	34万1494
	1873年	23万8663

D　三都の繁栄

17 世紀後半、江戸・大坂・京都は当時の日本列島でも突出した規模の人口を持つ大都市になった。江戸は、将軍の居城である江戸城を中心に、旗本・御家人や参勤した大名とその家臣が居住する巨大な城下町であった。江戸の町方の人口は 50 万人になり、他に武士が 50 万人とすれば合計 100 万人と推計され、世界最大級の都市であった。

問 4　関東地方の農村の商品生産だけでは、膨大な人口をかかえる江戸の需要をまかなうことはできなかった。それでは、どこから運ばれてくるのだろうか？

E　町人のサクセスストーリー「日本永代蔵」

1688 年、江戸時代中頃に書かれた『日本永代蔵』。30 の短編集で、日本で初めての経済小説といわれている。作者は、小説や俳句で知られる井原西鶴。大坂の商人出身です。西鶴は、商売をなりわいとする町人たちをとりあげ、日本各地の富を築いた人々の生活や、商いの工夫を描きます。時は、元禄時代。天下に平和がおとずれ、商業が栄え、市場経済が発達。努力や才能次第で富を築くことができるこの時代。金をめぐり、さまざまな人間模様が繰り広げられた。豊かさを求める風潮を読みとった西鶴は、全国の金持ちの情報を集め、取材。そして、金儲けの秘訣や商人にまつわる逸話を描いた『日本永代蔵』は、ベストセラーとなった。『永代蔵』は、永遠に続く金蔵という意味です。

←三井が出した越後屋の様子。四十人余りの店員一人に一種類の品物を担当させた。毛織物一人、麻の袴一人というふうに。急に奉公口が決まった侍が、主君にお目見えするときの羽織などは、数十人もかかえた職人が居ながらにして即座に仕立てて渡してやる。そんなふうだから家は繁盛し、毎日 150 両平均の商売をしたという。

問 5　井原西鶴がこのような本を世に送り出すことができた背景は何だろう。

まず、これまでの学習を次のように振り返りを行ない、考える上での前提を確認した。

①刀狩によって、農村から武器が奪われたが、足軽として戦乱に参加したり、人夫として戦争に動員されたりすることもなくなった。

②太閤検地により、名主のもとで小作をしていた小農民が検地帳に登録され、自立し本百姓となった。

③惣村のリーダーである乙名・沙汰人たちは村の名主となるか、大名に仕官して武士になるか選択を迫られ、兵農分離が進んだ。

④村の年貢は名主がまとめる村請制となり、村の自治的運営は残された。

今回は人々の生活はどのように変わったのかを自由に記述させるものとなるため、仮説の文例を示し生徒が考える上での参考とした。

仮説を生徒が考えるために【A】シーボルトの『江戸参府紀行』[4)]【B】耕地面積の推移のグラフ【C】農業全書【D】三都の町方の人口の推移【E】井原西鶴の『日本永代蔵』の５つの史資料と「問い」からなる授業プリント（図４参照）を用意した。問１から問５までの設問を考えると、テーマにそった仮説の準備が出来るように工夫した。『農業全書』の挿入した図は何か問うと、すぐに「大根」という答えが返ってくる。漢字にはすべてふりがながつけられていて当時の農民にも（私たちにも）大変読みやすいものである。「耕地面積が増え、このような農書が普及すると、農民の暮らしはどうなるだろうか」という問いからは、生徒は農民が米以外の商品作物を栽培し、商業的農業に参入していくイメージを持つことができるはずである。５つの史資料はすべてお互いが密接に関連のあるものとして意図的に用意しており、それらを複数組み合わせることで仮説を立てることが出来ると考えた。

生徒が考えた主な「仮説」は表４の通りである。「仮説」の文中で多かった語句は「豊か」「娯楽」「余裕」「農業に専念」「経済の発展」などであった。５つの史資料すべてを用いて仮説をたてた生徒はいなかった。一番多く使われたのが「仮説１」のようにAの旅行とCの農書の組み合わせであった。史資料を２つ組み合わせて記述した仮説が多かったが、Cの『農業全書』と他の史資料を組み合わせたものが多数を占め、『農業全書』が生徒に与えたインパクトが大きかった事が窺える。まだ学習をする前に仮説を立てることで、たてた予想が外れるケースも散見される。「仮説２」の刀狩の影響で一揆がなくなるという予想は、外れるわけだが「武器を持たずに百姓はどのようにして立ち上がるのだろうか？」という新たな「問い」とともに百姓一揆を学習することが可能となる。仮説がある程度正しい見通しであっても、そうでなかったとしても生徒が立てた仮説を教師が活用し学習への興味を引き出すことが大切なのではないだろうか。

「仮説４」では、「耕地面積の拡大は、農民と幕府がお互い得な関係になった」とあったので、これを導入にして２時間目の「農業生産の発展」の授業をおこなった。検地帳にもともと記載された本田に対して、新たに開かれた土地を新田というが、新田開発後は開発後３～５年は年貢が免除され、多くの小農民を移住させている。飢饉などで没落した小農民に土地を与え自立させる目的もあったとして、再び「新田開発は誰のためにやっているといえるか？」と問いかけた。

「仮説３」や「仮説６」では、「農民が商人のように作物を売買する」、「仮説５」では「自分で作れる作物を増やしてそれを売買することで町の経済を回す」という表現が登場する。この３つの仮説は、５時間目の「江戸時代の物流」の授業の導入で活用した。この授業では「株仲間」「蔵物と納屋物」「在郷商人」などの説明を行なう。農業が稲作第一か

ら商業的農業へと転換するにつれて、百姓身分のなかから商業活動を幅広く展開する人々（＝在郷商人）が登場し、やがて彼らは幕府の許可を受けて流通を主導する株仲間をつくる問屋商人と対立するようになる。18世紀から19世紀にかけて村落の生産力が向上したこと、19世紀後半から地域間取引が増えて、大坂の蔵屋敷を経由する取引が減少していき、大坂の株仲間にとってはそうした在郷商人の動きは大きな痛手になったわけで、まさに「仮説６」のように「経済の中枢に農民の力が及んだ」といえるだろう。文章表現は教科書のような文体ではないが、生徒が自分の頭で考えた表現となっている。

「仮説８」は、今回作成した史資料をほとんど参照していないが、ユニークな視点だと思う。戦争のない時代には、武士の理想像も変わり、勇猛な武士は不要となり、民を安心させる統治者となることが要求され、領主は仁政をほどこす仁君であることが求められるようになった。池田光政の家臣への教諭の史料を扱う際に、この仮説を導入として活用した。

表４「戦乱がなくなったことで人々の生活はどのように変わっただろうか」に対する「仮説」

		参照資料
1	戦乱がなくなったことで、時間に余裕が生まれて無駄な出費もなくなり、様々な産業が自由に発達すると思いました。『農業全書』のような農書が刊行されて、商品作物の種類が増え、販売できる商品の幅が広がり農民の生活は豊かになっていくと思いました。また、戦乱がなくなり平和になったので、庶民でも旅行できるようになりました。自分の育てた商品作物が良く売れるようになった収入で旅行の費用に充てられていたと思いました。旅行が盛んになることで、国内の経済はより活発になったのではないだろうか。	ＡとＣ
2	戦乱がなくなったことで、民衆は戦争に動員されることがなくなった分、『農業全書』のような本から得た知識で、作った作物をお金に換え生活が豊かになったのではないか。その影響で日本料理の幅が広がったり、旅行に行けるようになったと思う。刀狩によって農村から武器が無くなったことで、幕府や領主に逆らう一揆が起きることもなくなったのではないか。	これまでの学習とＣ
3	これまでは戦乱に参加させられたり、名主のもとで耕作をしていたりしていたが、戦乱がなくなり、小農民も検地帳に登録されることで、農民はより農業に専念できたのではないか。このことで、作物の量や種類が増え、農民が商人として作物を売買することで経済的に発展したと考える。	これまでの学習とＣ
4	城を作る技術が河川の洪水を防ぐ技術に役立っていった。お米を中心に作っていた生活から商品作物をつくる生活になり、農民の生活が豊かになった。農民はお金を手に入れる機会が多くなり、農民の中でも差が生まれてくると思う。人々はより豊かになるために農書などの本を読み、それを読むために学習に意欲的になり、結果的に経済が成長していくと思う。耕地面積の拡大は、農民もいろいろな商品作物を作ることが出来るし、幕府も年貢として幕府にかえってくるので、お互い得な関係になったと考える。	ＢとＣ
5	百姓は年貢を納めるだけでは生活に余裕ができないと思うから、『農業全書』などを学んで、自分で作る作物を増やしてそれを売買することで町の経済を回すようになっていくと思う。その影響でその地方にしか出来ない特産物ができたりすると、全国規模の物流が発展すると思う。幕府は物流による収入を得ようとして、何らか関与してくるかもしれない。物流の発展のための交通整備を幕府が担うのかなと思う。	ＣとＤ
6	平和になって、農民が戦いを生活の一部にして乱取りなどで生計をたてることはなくなり、農業に集中することができるようになったから、戦争に使っていた土木技術を農業に活かし、耕地は拡大した。識字率が上がったことで、『農業全書』を読み、商品作物を作る力を得て、戦乱を生き抜いてきた自治と団結の力があるので、農民たちの暮らしは、今までのただ年貢を納めるだけの存在ではなく、商人のように市場経済に乗り込んで、商才次第でより豊かになったり、経済の中枢に農民の力が及んだりすると思う。	ＢとＣ
7	人々は『農業全書』や『日本永代蔵』を読み始め、人々の心から戦争の恐れなどが忘れられ、金儲けや成功といった現代人のような思想が生まれてくるのではないかと思う。そのため、本を読む人が増え、生活が豊かになり、子どもに学ばせる寺子屋が増え、経済が爆発的に成長していくと思う。	ＣとＥ
8	武士にとっては、自分の身分の証明になる戦乱がなくなってしまった。武士より平民の方が生産性があるので、武士は何をすればよいのか、その存在意義が問われるようになると思う。	これまでの学習

このように、生徒が考えた「仮説」をできるだけ多くの機会をとらえてプリントや黒板に投影するスライドに盛り込み、授業の中で活用することにした。また、生徒が考えた「仮説」に関連する史資料を授業の前に用意して「仮説」を検証できるようにした。

（3）アンケートの結果と考察

「仮説」を立てることと、「ポートフォリオ」に記入することについて２学期が終わった時点で振り返りのアンケートを行なった。

「仮説を立てることを通じて、その後の学習に展望をもつことができましたか？」と聞くと、①そう思う27人（42.2％）②ややそう思う31人（48.4％）③あまりそう思わない５人（7.8％）④そう思わない０人（０％）であった。仮説を立てることによって、その後の学習に展望をもつという効果はあると言えるだろう。肯定的な回答の理由は、「ある程度の見通しをもってから授業にいどむと、自分の立てた仮説があたっていたり、ちょっと違ったりと意識しなくても考えるようになった。自分の見解を持っていると、歴史の内容が頭に残るだけでなく、楽しみながら勉強することができた。考える楽しさや無意識に自分で考えが出せるようになった」「自分が立てた仮説によって、将軍や守護大名の権力や民衆の力が今後どうなっていくのか考えながら学習できた。何も知らない状態で授業を受けるよりも、頭に入ってきやすかったし、見通しを持って授業を受けることができた」などであった。否定的な回答の理由は、「仮説をうまく立てることが出来なかったので、その後の学習に展望を持つことができなかった」などであった。仮説が不十分だった生徒には丁寧な個別のフォローが必要であった。

「仮説を立てることについて」の自由記述には、「根拠をあきらかにして仮説を考えるのが大変だった」という感想が複数寄せられた。10月の授業では史資料を５つ用意していたが、６月の授業では２つであり、根拠を考える材料が十分ではなかったと反省している。生徒がその時代の特色を考えるに適した史資料と教員からの問いかけをどのように準備するかが重要なポイントであろう。

ポートフォリオについては、次のような記述があった。「毎授業後にポートフォリオを書いたことによって、将軍権力・守護大名・民衆の３つの観点で出来事を観ることと考える事ができた。仮説を立てたことによって自分のその時代についての考えや理解が深まった」とあるように、最初に立てた仮説を意識しながら、その日の授業のまとめを記すことが出来ている生徒がいる。一方で、「授業中にポートフォリオを書き切れなくて、少しためてしまったことがありました。そうすると、話の特徴がつかみにくく、理解が追いつかないことがありました。ためるとまとめて書かなければならないので大変でした。」とあるように、授業内にまとめることが出来ずに苦労した様子が窺える。

３．おわりに

室町時代後半の単元では、単元の目標を「室町時代後半の特徴をとらえよう」とし、①将軍の権力②守護大名の権力③民衆の力という３点を基軸として室町時代後半の特徴を、簡単な根拠を示しながら生徒に仮説を立てさせた。江戸時代中期の単元では、単元の目標を「戦乱がなくなったことで人々の生活はどのように変わったのだろうか」とし、生徒の思考を誘発する史資料を用意し、仮説をたてさせた。授業後のアンケートでは、「仮説」を立てることが今後の学習の展望を持つことに役立っていることがわかった。ポートフォリオについては、授業内に書くための時間を十分に確保できないという課題もあるが、１つの単元を１枚のポートフォリオの中に学習履歴を「見える化」することで、生徒にとっては授業の中の気づきの保存・振り返りにな

り、教師にとっても指導内容の改善につなげることができるツールであると再認識できた。

今回の授業実践では、生徒が「仮説」を立てることが中心になり、『日本史探究』の中項目（１）である、生徒が「時代を通観する問い」を立てる事については、授業で実践することができなかった。今後の課題としたい。

補論

以上、新科目『日本史探究』での中野氏の授業実践報告は本年で３回目である。

先ず、根気強く取り組んでおられる中野氏の熱意に敬意を表したい。

以下　５点、大いに評価し、補論としたい。

１.「仮説」を立てる学習活動を中心に、さまざまな史資料を提示したり問いかけをしたりして、生徒を意欲的な学習姿勢に仕向けていること

２. 生徒の理解度と思考の様子を予想し、史資料を始め、生徒が分かり易い例示やヒントを提供していること。

３. 生徒の仮説や振り返りを、温かい眼で評価していること。

４. 生徒の一連の学習の流れを、１枚ポートフォリオとしてまとめて概観させ、俯瞰させることで今後の学習の展望を垣間見させようと試みること。

５.「時代を通観する問い」を立てる事について実践出来なかったことを反省されているが、これも誠実な授業実践である。

松本が担当している専門科目では、このような中野氏の実践を参考にしていきたい。

【註】

１）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　地理歴史編』p198。

２）堀哲夫『新訂　一枚ポートフォリオ評価 OPPA－一枚の用紙の可能性－』（東洋館出版社、2019年）。

３）「参勤交代と幕藩体制」「百姓たちの生活世界」「江戸時代の対外関係」（『日本史探究』東京書籍）「大名配置・朱子学と風刺・商品作物の生産・貿易と情報の入手」（『高等学校日本史探究』第一学習社）「武家諸法度と禁中並公家諸法度」（『高等学校日本史探究』清水書院）「武家諸法度の条文の移り変わり」（『日本史探究』実教出版）「外国人がみた日本の近世」（『精選日本史探究』実教出版）「朝鮮通信使」（「生類憐みの令・服忌令」（『詳説日本史』山川出版社）「朝鮮通信使」（『高校日本史』山川出版社）

４）シーボルト著・斎藤信訳『江戸参府紀行』（東洋文庫・平凡社、1989年）

【付記】

授業実践を行うにあたり、松本浩之先生（文教大学）・加賀大学先生（神奈川大学）・笠谷一夫先生（駒澤大学）・草川剛人先生（武蔵大学）・内田圭亮先生（神奈川県立相模原中等教育学校）から貴重なご教示をいただきました。ここに深謝の意を表します。